



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第4主日B年(2021年3月14日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：歴代誌下 36章14-16、19-23節

第二朗読：使徒パウロのエフェソの教会への手紙 2章4-10節

福音朗読：ヨハネによる福音書 3章14-21節

今日のテーマ：人の子はあげられなければならなかった

今日の第一朗読では『歴代誌』が読まれます。この書にはイスラエルの民のバビロン捕囚から帰還までの歴史が描かれています。『歴代誌』を記した作者たちは、おそらく捕囚からの帰還を実際に体験したのでしょうか。ですから、エルサレムへ戻ってきた段階から、過去を振り返って捕囚の事実を眺め、書き記したのです。同じような構図が福音書にも見られます。『ヨハネによる福音書』の作者たちも、イエスさまの復活の出来事に直面して、復活したイエスさまと出会ったのでしょうか。そしてその事実から、生前のイエスさまの行動、お話を理解していったのです。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない」(ヨハ3章14節)は、イエスさまの復活の事実の照らされて、イエスさまの十字架の受難を眺めたときに、かつてモーセが青銅の蛇を旗竿に掲げて人々が癒されていったという史実と重ね合わせて理解したのだと考えられます。

第一朗読で、『歴代誌』の作者たちは、捕囚の出来事を歴史の一コマとして見えています。では、捕囚の間の人々がエルサレムにいなかったという事実はどのように理解されたのでしょうか。彼らは、エルサレムが無人の期間を、再び実りをもたらすまでの「安息」の年としてとらえたのです。

第一朗読にある「こうして主がエルサレムの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した。その荒廃の全期間を通じて地は安息を得、七十年の年月が満ちた(歴下36章21節)を味わってみましょう。「安息」とは、耕している土地を休ませることで、荒れるにまかせ、実を結ばないまま放っておくことで、地力は回復していきます。同じように捕囚の地にイスラエルの民が連れて行かれた間、約束の地であるイスラエルは安息し、荒廃し、実を結びま

せん。しかし、地の深いところでのちは回復しつつあります。「罪に罪を重ね、主が聖別されたエルサレムの神殿を汚した」(14節)は、わたしたち一人ひとりのことです。罪を犯し、罪を重ね、罪の虜になっているわたしたちは、こころの深いところにある主の神殿から離れ去っています。無人のエルサレムのように荒廃し、実りを結びません。しかし、それは「安息」の時です。神ののちは着々と回復しつつあります。必要なのもう一度、こころに神殿を建て直し、神の呼びかけに答えていくことです。

第二朗読にある「わたしたちをこの上なく愛してくださり」(エフェ2章4節)をこころに刻みましよう。罪深い者にもかかわらず、神さまは先にわたしたち一人ひとりを愛してくださったのです。神さまの愛がいつも先行します。フランシスコ会訳は「しかし、神は憐れみに満ちておられ、わたしたちを愛してくださった。その大いなる愛によって」となっています。この上なく愛してくださる神さまは、大きな愛でわたしたち一人ひとりをつつみ、ゆるしてくださるのです。先行する神からの愛を感じて、はじめてわたしたちは神を愛することができますし、人を愛することができるのです。

福音朗読の言葉、「人の子も上げられなければならない」(ヨハ3章14節)はイエスさまの覚悟を示す言葉です。神から愛された「神の子」であるイエスさまは(第二主日)、熱情の方でした(第三主日)。愛の熱情のために自らが十字架に上げられることをいとわない方だったのです。

説教

もう、二十年近く前、ローマ行きの飛行機でたまたま乗り合わせた大阪教区の和田幹男神父様のひと言がいまだに響いています。「なぜ、イエスは十字架にかけられたのかという問いかけは、とても大切な問いだと思います。ボクはこう思います。ひとりのイスラエルの男が神への愛に生き、隣人への愛に生きるという律法に忠実にあろうとした時に、最後に残された愛し方は十字架しかなかったのです。人の子はあげられなければなかったのです。」

十字架にイエスさまに愛の姿を見出すことができますように。そして、イエスさまと同じような「愛の犠牲」となれますように。